

オイディプス物語の変容

——戦後小説としての『ウルトラマリン』¹——

横 内 一 雄

Synopsis: Malcolm Lowry's *Ultramarine* tells of a young deckhand, Dana Hilliot, on his first voyage. Predictably, it is a tale of adolescent progress, and overtly based on the myth of Oedipus Tyrannus, whose name appears in the novel as the name of the freighter. Dana undergoes persecution from Andy, one of his shipmates, and yet feels envy of his rich experience in adventures. When he challenges Andy, Dana ends in fiasco to learn about Andy's war experience.

Focusing on the references to the war, this paper proposes to read Dana's struggle in terms of the "generation war" in the late 1920s, in which the post-war generation envied the war generation for their first-hand adventures in the battlefield. This envy is, of course, unreasonable. The paper concludes that by making his hero recognize his error, Lowry set an example to solve generational antagonism and provided a post-war version of the Oedipus myth.

1. はじめに

マルカム・ラウリー (Malcolm Lowry, 1909–57) の処女長編『ウルトラマリン』 (*Ultramarine*, 1933) は、貨物船の甲板員ダナ・ヒリオットの極東行きを描いた、文字通り「海の彼方」^{ウルトラマリン}の物語である。ダナは一介の新米船員であるが、この職業には珍しくブルジョワ階級の出身であり、生活のためではなく「楽しむため」 (“To amuse myself” [*Ultramarine* 38]²) に乗船した身分である。そのため他の船員たちとの間に溝を生じ、親分肌の料理長アンディからは「経験を求めて船員になるような坊っちゃん嫌いだ」 (“I hate those bloody toffs who come to sea for experience” [*U* 20–21]) と目の敵にされる。ダナは、そうしたアンディを含む船員仲間になんとか受け入れられようと努力を重ね、最後に報われる。パトリック・マッカーシー (Patrick A. McCarthy) が本作の主題を「成人男性になるための通過儀礼」 (“in-

itiation into manhood” [McCarthy 16]) と捉えているのは、きわめて適切であると言えよう。

この観点からすれば、ダナたちの乗る貨物船が「エディパス・ティラナス号」(the *Oedipus Tyrannus*) と名付けられているのは意味深長である。ギリシャ神話におけるオイディプス王は、現在の地位を築く過程で知らずに父を殺め、母と交わった。この行為は、しばしば青年が自己を確立する過程で潜り抜けなければならない試練を象徴的に表現したものと解釈される。すなわち、少年が大人の男に成長するためには、どこかで象徴的な父殺しを敢行し、禁じられた異性との交わりを成就しなければならないのだ。フロイトはこの神話に触発されてエディパス・コンプレックスの理論を提唱したが、弟子のアーネスト・ジョーンズ (Ernest Jones) はそれを敷衍して、古今の青春文学が象徴的な父殺しのプロットを隠し持っていることを明らかにした。ラウリーは『ウルトラマリン』の初版から「エディパス・ティラナス号」の名前を採用していたわけではなく、1950年代に同作を改訂する過程で『火山の下』(*Under the Volcano*, 1947) との整合性を図るために貨物船の名前を変更したに過ぎないが、逆に言えば、事後的にであっても敢えてこの名前を採用したことは、ラウリーの意図が奈辺にあったかを示唆するように思われる。蓋し『ウルトラマリン』は、西洋文学において連綿と受け継がれてきたオイディプス物語の一変奏と見なせるのだ。³

それでは、ラウリーは1930年代という時代においてオイディプス物語をどのように変奏したのだろうか。従来『ウルトラマリン』は時代を超越した寓話と見なされ、あまり時代の文脈で読み解かれてはこなかった。もっとも、例外がないわけではなく、マーク・ウィリアムズ (Mark Williams) はラウリー文学全体を1930年代の英国文芸文化への応答と見なし、ラウリーは自身の出自であるブルジョワ階級から離脱するために『ウルトラマリン』で船員の俗語を模倣したのだと論じている。また、パトリック・ディーン (Patrick Deane) は『ウルトラマリン』を1930年代の歴史的な文脈に送り返し、当時の社会的言説を参照することで、同作を階級闘争の物語として読み替えている。こうした読みは、冒頭で要約した物語の梗概から見て、妥当な

解釈だと言えるだろう。しかし、それだけで『ウルトラマリン』が時代と切り結ぶ仕方を言い尽くしたことにはならない。本稿が強調したいのは、この時代——より正確に言えば、ラウリーが『ウルトラマリン』を執筆していた1927年から1933年までの時期——が、サミュエル・ハインズ(Samuel Hynes)の言う沈黙の十年を経て、第一次世界大戦を回顧する文学が陸続と現れた時期に重なっていることである。ハインズはこの時期の文学的成果を次のように整理する。

- 1926: Ford Madox Ford, *A Man Could Stand Up*; T. E. Lawrence, *Seven Pillars of Wisdom* (the private printing); Herbert Read, *In Retreat*;
- 1927: Lawrence, *Revolt in the Desert* (the public version of *Seven Pillars*); Mark VII (Max Plowman), *A Subaltern on the Somme*;
- 1928: Ford, *Last Post*; Edmund Blunden, *Undertones of War*; Siegfried Sassoon, *Memoirs of a Fox-hunting Man*; E. E. Cummings, *The Enormous Room*; Arnold Zweig, *The Case of Sergeant Grischa*;
- 1929: R. C. Sherriff, *Journey's End*; Erich Maria Remarque, *All Quiet on the Western Front*; Richard Aldington, *Death of a Hero*; Robert Graves, *Good-bye to All That*; Ernest Hemingway, *A Farewell to Arms*; Ernst Jünger, *Storm of Steel*; Charles Carrington (Charles Edmonds), *A Subaltern's War*;
- 1930: Henry Williamson, *Patriot's Progress*; Sassoon, *Memoirs of an Infantry Officer*; Private 19022 (Frederic Manning), *Her Privates We*;
- 1931: *The Poems of Wilfred Owen* (Blunden's new edition, with his memoir);
- 1933: Vera Brittain, *Testament of Youth*; Herbert Read, *The End of*

a War.

(Hynes, *A War Imagined* 424–25)

すなわち、この時期、ラウリーより少し上の戦争世代は自身の戦争体験を何とか総括しようと声を上げ始めていたのである。ラウリーがこれらの作品全てに関心を持った証拠はないが、それでもこれだけ陸続と現れる戦争文学に無関心のまま創作活動に打ち込めたとは考えにくい。実際『ウルトラマリン』には先の大戦への言及が散りばめられており、そのいくつかはプロット上で重要な役割を果たしている。そのことを踏まえて『ウルトラマリン』を読み直すと、物語全体が戦争文学復興リバイバルの機運に対する戦後世代からの回答の様相を呈していることが明らかになるように思われる。以下、そのことを示すために、まずは『ウルトラマリン』の物語を支えるオイディプス物語の枠組を明らかにし、続いてそれが戦後の変奏を施されて提示されている様を論じていきたい。⁴

2. 海の彼方のオイディプス

『ウルトラマリン』は、ダナの両親がいる英国から遠く離れた極東を舞台にしているため、一見すると彼らの関係を主題にした物語には見えにくい。しかし、ダナが船員生活に身を投じたのが、自身の出身階級を離脱するためであったことを考えると、そこには潜在的に両親からの自立という主題が見え隠れする。それでもダナは乗船する際には父に車で埠頭まで送ってもらい、アンディから「坊っちゃん」(toff)呼ばわりされてしまう(U 20–21)。また、彼は母国にジャネットという恋人を置いてきているのだが、彼女に貞節を誓ったがゆえに同僚たちとおか陸に女郎を買いに行くことができず「お前はガキだ、ママと家にいろ」(“You’re a kid should be home with its mammy” [U 59])と擲揄されてしまう。さらに、ようやく意を決して女郎を買いに行こうとしたところに、母から「さぞ快適で清潔清潔にしていることと思います。うちの子が野卑な連中に汚されるのを見たくはありませんか

ら」(“I do hope you are comfortable and keeping *clean*, because I don’t want my son coarsened by a lot of hooligans” [U 90–91]) と暗に墮落を牽制する手紙が舞い込み、釘を刺される。このように、ダナは両親と表面上は良好な関係を維持しながら、その実彼らに自立を妨げられていることを意識する機会を何度か持つのである。そうした愛情深い両親の心理的拘束を振り切って、船員仲間と交わり女郎を買いに行こうとするダナの物語に、家族からの独立という主題が託されていると見るリチャード・K・クロス (Richard K. Cross) の指摘は正しい (Cross 3)。

しかし、所詮はそういった両親から遠く離れた「^{ウルトラマリン}海の彼方」の物語。ダナの精神的成長は、実父・実母との関わりにおいてよりも、むしろ代理父・代理母との関わりにおいて図られると見るべきだろう。エディパス・ティラナス号上でダナにとって父親の代理を務めるのは、言うまでもなくアンディである。アンディはダナより 20 歳年長で、その名も示す通り——Andy の語源はギリシャ語の *andreios* (*manly*) である——男らしい巨漢であるばかりでなく、船上で誰よりもダナを苛める急先鋒でもある。ダナは彼に憎悪を抱き、いつかその欠損した顎先を罵倒して彼をやり込めてやりたいと考えているが、その一方で、船員仲間を受け入れられるためには、まずアンディに認められなければならないことを理解している。そしてさらには、経験豊かなアンディの風格に憧れを抱き、彼の中にある種のロールモデルを見出していることも、次の記述などから窺える。

Yet he knew himself to be jealous of those splendid adventures ashore Andy boasted of so magnificently, adventures in which he himself would have dearly liked to have been included, and of which any first voyager might be truly envious: or was it, he asked himself, that he wished to boast of them merely, rather than to be included in them, to be part of them? Or was it that he really hated Andy, the ‘chinless wonder,’ that his interpretations of his attitude as friendly or jealous were both equally false? Anyway, it would be

admirable to score off Andy sometime, about that particular physical defect. ‘You chinless wonder,’ he would snarl it out, with portentous contempt – (U 22)

ダナはアンディが誇らしげに語る冒険の数々に「嫉妬」(“jealous”)や「羨望」(“envious”)の感情を覚えている。それでいて、彼には確かに「嫌悪」(“hated”)をも抱いていて、その相反する感情の共存に戸惑う姿がここには捉えられているのである。自分でも分からなくなるこうした混乱した感情は、まさに一方では父を尊敬しながら、他方で彼に敵意を抱く息子の両面感情に他ならない。ダナと実父との心理的關係は本作では追求されないが、それがここではダナとアンディの關係に転移・反復されていると見ることができるだろう。

フロイトの構想したエディプス・コンプレックスにおいては、息子と父の關係の根底には女性の存在がある。上の引用においても、ダナが嫉妬するアンディの「陸での素晴らしい冒険」には、当然港町での「^{アヴァンチュール}恋の冒険」が含まれていると理解すべきだろう。実際、ダナがアンディに嫉妬と嫌悪の両面感情を抱くのは、彼我の間に横たわる女性経験の差に思いを致すからである。例えば先の引用の数頁先には、次のような一節がある。

He was thinking of the first time he had seen Andy in the booth, where he had been talking about a girl in Tsintao, on the bathing bench there. How on earth, how, he asked himself, could a woman like a man with no chin? Yet Hilliot knew nothing about women, not in Andy’s sense, although there was Janet of course; yes, perhaps that was precisely what was wrong with him. . . . (U 25–26)

ダナが初めてアンディを見たとき、アンディは「^{チンタオ}青島の女」について語っていた。これは先の引用におけるアンディの「冒険」の一つと見てよいだろう。アンディは、冒険をした勇者が当然享受する報奨として、旅先で得た恋

人——恐らくは娼婦であろうが——に言及するのである。これに対して、ダナは「アンディのような意味ではまだ女を知らない」。これは故郷で待つ恋人ジャンネットとの間に肉体関係がないことを示唆するのか否か、いささか曖昧であるが、いずれにせよ、彼は女性経験に関してアンディに劣等感を抱いており、その裏返しとして、顎先を欠損しているくせに女にもてるアンディに醜いやっかみを覚えるのである。

果たしてダナの成長は、こうした女性経験に関する劣等感を払拭する方向で図られる。彼は、恋人への忠誠のために貞節を守ろうとして仲間から散々揶揄されたことを受けて、母親や恋人の心理的拘束を振り切って陸に女郎を買いに行くことこそが、仲間に認められるための最良の方法でありまた一人前の男になるための契機であると確信するのである。そこでダナは、物語の第3章で極東の港町チャンチャンへの上陸を決行し、街の酒場でロシア人娼婦オルガと知り合うが、彼女に上階（個室）に誘われた途端に母からの手紙を思い出し、決意を揺るがせてしまう。それでも愛を確認し合い、また戻ってくることを約束して外へ頭を冷やしに行くが、しばらくして戻ってみると、オルガは既に別の船員にもなっている。そしてこの別の船員がアンディであることが発覚することで、ダナの失意とアンディへの憎悪は極点に達する。

ここで、ダナに真心の愛を保証しておきながら、いざという段になると経験豊かな年長者のもとに走るオルガは、この海の彼方の世界においてダナの母親の役割を演じているとすることができる。フロイトの構想では、母親は息子に欲望され、時にその事態を自ら惹起しながらも、最終的にはそれを撥ね付け、父親のもとに走って息子を失望させる。そしてこの一人の女性をめぐるダナとアンディが対立するという図式は、本作におけるオイディプス物語の枠組をひとまず完成させるのである。ダナは自分に愛を約束した女性をアンディに横取りされたと感じ、これまでに募らせた恨みを翌日には殺意へと発展させる。そしてその殺意を実行に移し、ダナがアンディの顎先を罵倒して彼に挑みかかる場面が、全編の山場となる。

ところが、通常のオイディプス物語であれば象徴的な父殺しに至るべきこ

の場面において、ダナの挑戦は意外なほど尻すぼまりの決着を迎える。ダナの罵倒を受けて、アンディが猛然と反撃してくるかと思いきや、彼の反応は描かれず、代わりにダナの暴言を諫める他の船員の言葉が引かれる。

‘Yes, go easy, boy . . . We all know, you see, that Andy lost his chin in the War, and he’s had plates in it, and all, and if you hit him on it, he might croak. You mustn’t talk like that. We know it’s your first voyage and you get just the same as any of us got on his first voyage. Andy and I’ve been shipmates for ten years. You mustn’t talk like that. Go easy, man.’ (U 141-42)

すなわち、この船員の発言により、アンディの顎先の欠損が先の大戦における戦傷であり、打撃に耐えられないほど脆弱であることが明らかにされるのである。この言葉を受けて、ダナはそれまでの戦意を喪失してしまい、その場を無言のまま立ち去るばかりか、翌日には彼に謝罪を申し入れて受け入れられ、果てには「僕はアンディと同一だ。僕はアンディだ」(“I have identification with Andy: I am Andy” [U 170]) と言うほどの一体感に包まれる。こうしてラウリーが書いた現代版オイディプス物語は、拍子抜けするほど穏やかな結末に導かれる。ラウリーは、現代のオイディプス物語を成立させるために周到な準備をしながら、いざ物語の要を書く段に至って象徴的な父殺しを回避する選択をしたのである。これは何のためなのか。そこにはどのような意図が込められているのだろうか。

3. 戦後世代の通過儀礼

まず押さえておきたいが、ダナが船員の言葉を聞いてアンディへの殺意を喪失したのは、何もそのとき初めてアンディの弱点を知ったからではない。ダナは物語冒頭からアンディの顎先の欠損を意識しており、それを面前で罵倒することさえ夢想している。だから、例えばあれだけ強がっているアンデ

ィに弱点があることを、対決場面で初めて知って意気が萎えたわけではない。だとすると、彼が衝撃を受けたのは、やはりその弱点が先の大戦に由来することを知ったからだと言わざるを得ない。彼は恐らくは、アンディが先の大戦で戦った元兵士であることに反応したのだ。この点について、ウィリアムズの評釈が示唆に富む。

The emotional climax of the novel occurs when Dana throws at Andy his chinlessness. Here Dana makes the discovery that Andy had lost [h]is chin in the war. Andy, then, is the idealized older brother of all Lowry's generation, the cause of their feelings of inadequacy and guilt, who, having passed "The Test," holds the key to manhood. In Dana's desire to be accepted by Andy as a man in his own right, we see the desire of a whole generation to confront the myth that had caused them to feel demeaned. (Williams 83-84)

すなわち、ダナとアンディの対立の背景には、第一次世界大戦という大いなる試練（“The Test”）をめぐる特殊な世代間対立がある。ダナがアンディに負い目を感じるのは、アンディには己が身を犠牲に戦った経験があるのに、自分にはそれが無いからだ。ウィリアムズはこれ以上の議論を展開していないが、この洞察を踏まえて『ウルトラマリン』の全体を読み直すと、そこに埋め込まれたオイディプス物語は常に大戦にまつわる世代間対立によって偏差を受けていることが分かる。

ここでダナとアンディの年齢差を整理しておこう。二人は物語冒頭で回想される面接場面でそれぞれ 19 歳と 39 歳であることが明示されている (U 15)。物語時間も作中で 1927 年 6 月と明記されている (U 89) ことから、ダナはおよそ 1907～8 年生まれ、アンディは 1887～88 年生まれであると推察される。これは、例えばクリス・ボールディック (Chris Baldick) の分類に従えば、典型的な戦後世代 (the post-War generation) ——1900 年以降生まれ——と戦争世代 (the war generation) ——1875 年～1899 年生

まれ——に該当する。文学者で言えば、ダナはラウリー自身（1909年生まれ）やW・H・オーデン（1907年生まれ）とほぼ同世代でイヴリン・ウォー（1903年生まれ）やグレアム・グリーン（1904年生まれ）より若干年少、一方のアンディはT・S・エリオット（1888年生まれ）やルパート・ブルック（1887年生まれ）、シーグフリード・サスーン（1886年生まれ）と同世代で、ウィルフレッド・オーウェン（1893年生まれ）やリチャード・オルディントン（1892年生まれ）より若干年長ということになる。そしてこれらの世代の間には、異常なほどの反目が存在したというのが、文学史的共通認識である（Baldick 27-30）。

ハインズはその名も『オーデン世代』(*The Auden Generation*)と題した著書の中で、この世代——ボールディックの分類では典型的な戦後世代——がすぐ上の戦争世代を意識しながら自己形成を遂げていった過程を詳述している。中でも、彼らが戦争に対して「深刻な両面感情」(“the feelings . . . deeply ambivalent”)を抱いていたという指摘は興味深い。彼はそれが「戦争の野蛮と無駄への嫌悪、そこで戦えなかったことへの罪悪感、そして戦った者への羨望が入り混じった感情」(“a mixture of revulsion at the brutality and waste of [the war], guilt at not having fought in it, and envy of those who had”)であり、この世代のアイデンティティを形成したことを指摘した上で、次のような諸家の証言を引いている。

[Christopher Isherwood (1904-1986)] We young writers of the middle 'twenties . . . were all suffering, more or less subconsciously, from a feeling of shame that we hadn't been old enough to take part in the European war. . . . [L]ike most of my generation, I was obsessed by a complex of terrors and longings connected with the idea 'War.'

[George Orwell (1903-1950)] As the war fell back into the past, my particular generation, those who had been 'just too young,' became

conscious of the vastness of experience they had missed. You felt yourself a little less than a man, because you had missed it.

[Philip Toynbee (1916–1981)] [I]t seems to me now that our picture of war was as falsely romantic, in its different way, as anything which had stirred the minds of Edwardian boys, brought up on Henty and the heroics of minor imperial campaigns. . . . [S]o that we felt less pity than envy of a generation which had experienced so much.

(Hynes, *The Auden Generation* 21; ellipses mine)

ここに挙げられた作家たちが口々に戦争に参加し損ねたことへの負い目を表明しているのは興味深い。彼らにとって、戦争は得難い経験を与えてくれる絶好の機会であり、オーウェルにとっては彼らを男にしてくれるもの、トインビーに至っては「羨望」(“envy”)の的ですらあった。もちろん、それぞれの作家がこれらの回想を書いている時点では、そのような感情が不謹慎なものであることを重々承知しているのだが、それだけにここに記された感情は当時の正直な気持ちであったろう。

ここで、先に引用した『ウルトラマリン』の一節を思い返してみたい。ダナはアンディが誇らしげに語る冒険——「自分も是非仲間に入れてほしかった冒険」(“adventures in which he himself would have dearly liked to have been included”)——を「嫉妬」また「羨望」していた。この心性は、今見た戦後世代に特有の戦争体験願望と奇妙に一致する。そもそも「冒険」(adventure)という言葉自体が、この世代にとっては特殊なコノテーションを持ち得た。ダナの世代の少年は——トインビーが言っているように、そしてラウリー自身がまさにそうであったように——帝国主義を背景に隆盛した冒険小説を糧に成長したため、現実の戦争をもその延長線上で捉えることが自然であった。また、ハインズによれば、大戦が勃発して半年ほどすると実際に戦争小説が出現し始めたが、それらの多くは「本質的に少年冒険物

語」(“essentially boys’ adventure stories”)であり「ヘンティやその模倣者たちの伝統を継いでいた」(“They continued the tradition of Henty and his imitators” [Hynes, *A War Imagined* 43])。より簡潔に、J・B・プリーストリー(J. B. Priestley)に言わせれば、「初期の戦争小説は粗野な冒険物語と愛国的な大言壮語の混合物であった。戦争は輝かしい冒険だったのだ」(“The first war stories were a mixture of crude adventure tales and patriotic rant: war . . . was a glorious adventure” [qtd. in Bracco 14])ということになる。こうした事実を踏まえて読み返してみると、アンディの「冒険」を羨むダナの意識は、戦争体験を羨む同世代の心性のアレゴリーにも見えてくるし、実際、おぼろげに察知されたアンディの戦争体験への嫉妬を含んでいる可能性もある。そうした意識下の情念を表に引きずり出してダナに直視させた契機が、アンディの戦争体験に言及した先の船員の発言だったのではないか。

アンディとの対決場面において、ダナが直視する破目になったのは、アンディへの対抗意識の影に潜む自身の戦争経験への拘り、戦争経験者への嫉妬、そして戦争を経験していない自分への負い目であったろう。船員の発言を契機に自身の内に燻るそうした感情に気づき、さらにはそれをアンディの顎先にまざまざと現れる戦争経験の代償と突き合わせたとき、彼は己れの拘りの愚かさを悟ったのではないか。こうした解釈がそれでも唐突に思えるなら、アンディとの対決場面と奇妙にパラレルな関係をなすポプルロイターのエピソードを参照してみてもよい。ダナは第3章でチャンチャンに上陸した際、別の船の乗組員であるドイツ人技師ポプルロイターと知己になるのだが、彼もまた戦争経験者としてダナに対峙する。もっとも、アンディとは違ってポプルロイターは温厚でダナにも友好的であり、ダナも彼とは良好な関係を築き上げることができるのだが、二人の会話で一度だけ、若干の緊張が生じる場面がある。それは、ダナがうっかりと戦争体験への憧れを口走るときである。

‘England good country. Wunderbar,’ hiccoughed Popplereuter.

‘Germany bloody good country,’ I hiccupped.

‘We fought because we had to,’ Popplereuter went on, ‘for the “balance of power”, you call it.’

.....

‘War is a bloody good thing,’ I said. ‘I’d like to fight against Belgium. I don’t blame you marching on the bastards.’

‘War is schrecklich, schrecklich. You have to fight to know that.’

‘Yes, war is schrecklich.’ (*U* 89; ellipsis mine)

ここでダナは、かつての敵国ドイツに好意を示すため、第一次世界大戦におけるドイツのベルギー侵攻を正当化し、自らもそれをやってみたくいと言わんばかりの発言をする。ところが、当のドイツ人であり、戦争もその後の敗戦も経験したポプルロイターにしてみれば、それは軽々に触れられたくない汚点であり、言葉を失った彼は「戦争は恐ろしい。戦ってみなければ分からない」とだけ呟く。それは、ダナをして思わず彼に同調させるだけの迫力を持っている。これこそが、アンディとの対決場面でダナを打ちのめした啓示の内容でもあったのではないか。ラウリーはこのような機会を通してダナに戦争の代償をはっきりと認識させることで、戦争経験を無邪気に羨望する心性を脱却することが、戦後世代に必要な通過儀礼であることを示唆しているのだ。それが恐らくは、ラウリーが現代のオイディプス物語を父殺しの放棄という方向に歪ませた理由だったのである。

4. おわりに

本稿を締め括るにあたって、もう一步だけ議論を進めておこう。ダナの目から見て、自らの「冒険」を「それは大層に自慢した」(“boasted of so magnificently”) アンディが、ラウリーにとって先行作家のアレゴリーである可能性はないだろうか。前述したように、ラウリーが『ウルトラマリン』を執

筆している間、巷では戦争体験を回顧する戦争文学が陸続と出現していた。その内容は、たとえ大戦初期の冒険小説とは違って幻滅とアイロニーに満ちたものであったとしても、そこには実際に戦場で戦った者にしか書けない迫力があつたはずだ。ラウリーがそうした戦争文学に憧れや嫉妬を抱いたかどうかは定かでないが、少なくとも自分たちの世代がそうした創作の機会から永久に疎外されていることを痛感しなかつただろうか。いみじくもラウリーより5歳年長の作家グレアム・グリーン (Graham Greene) は言っている。自分たちの世代は冒険小説に生まれながら、大戦で幻滅を味わうことがなかつたために、それに代わる「風変わりな題材」を求めて過酷な旅をしたがったのだと (“It was a period when ‘young Authors’ were inclined to make uncomfortable journeys in search of bizarre material. . . . We were a generation brought up on adventure stories who had missed the enormous disillusionment of the First World War, so we went looking for adventure” [Greene 45–46])。考えてみれば、ラウリーが貨物船の乗組員として『ウルトラマリン』の素材となる極東への旅に出たのも「幾許かの人生経験」 (“some experience of life” [qtd. in Bowker 67]) を求めてのことだった。しかし、ラウリーは、自身の極東体験を一部の先行作家たちのように「大層に自慢」することを最終的に避けたように思われる。『ウルトラマリン』に描かれたのは、所詮は船上での過酷な船員生活と、架空の港町における若干の白人同士の交流に過ぎない。彼が、例えばもっと彩り豊かな帝国ロマンスを書かなかつたのは、書けなかつたのではなく、むしろそういった奇特な体験を「大層に自慢」することの虚妄、あるいは少なくともそれをすることによって先行世代と張り合うことの愚かさを悟つたからではないだろうか。その認識を促したのが、先行世代の戦争体験をめぐる戦後世代の感情的葛藤ではなかつたかと示唆して、本稿の結論としたい。

注

¹ 本稿は、平成24年5月27日(日)に専修大学生田キャンパスで開催された日本英文学会第84回大会で行つた研究発表「エディプス物語の変容——戦後小説としての *Ultramarine*」の内容に大幅な加筆・訂正を加えたものである。

2 以下、典拠を示す際には書名を *U* と略す。

3 実際、リチャード・K・クロス (Richard K. Cross) は、本作の主題を「アイデンティティの探求」(“search for identity”)と捉え、ダナがアンディに代理父を見出し彼との一体化を図る物語にフロイトの「エディプス設計」(“the oedipal project”)との類縁性を見ている (Cross 3-12, 116-17)。

4 ラウリー文学と戦争の関係に焦点を当てた研究には、Sherrill Grace, *Strange Comfort: Essays on the Works of Malcolm Lowry* に収められた “Remembering Tomorrow: Lowry, War, and *Under the Volcano*” という論文 (Grace 189-213) があるが、『ウルトラマリン』については詳しく触れていない。

5 この架空の港町チャンチャンの造形と、そこで繰り広げられる白人たちの国民意識については、拙論 “I Am Going to Japan—or Aren’t I?” —『ウルトラマリン』における極東」を参照されたい。なお、同論では『ウルトラマリン』に影を落とすもう一つの「戦争」——中国における北伐と日本の軍事行動——についても考察している。

参考文献

- Baldick, Chris. *Literature of the 1920s: Writers among the Ruins*. Edinburgh: Edinburgh UP, 2012. Print.
- Bowker, Gordon. *Pursued by Furies: A Life of Malcolm Lowry*. London: Flamingo, 1994. Print.
- Bracco, Rosa Maria. *Merchants of Hope: British Middlebrow Writers and the First World War, 1919-1939*. Providence: Berg, 1993. Print.
- Cross, Richard K. *Malcolm Lowry: A Preface to His Fiction*. Chicago: The U of Chicago P, 1980. Print.
- Deane, Patrick. “*Ultramarine*, the Class War, and British Travel Writing in the 1930s.” *A Darkness That Murmured: Essays on Malcolm Lowry and the Twentieth Century*. Ed. Frederick Asals and Paul Tiessen. Toronto: U of Toronto P, 2000. 119-127. Print.
- Grace, Sherrill. *Strange Comfort: Essays on the Works of Malcolm Lowry*. Vancouver: Talonbooks, 2009. Print.
- Greene, Graham. *Ways of Escape*. London: Vintage, 1999. Print.
- Hynes, Samuel. *The Auden Generation: Literature and Politics in England in the 1930s*. London: Faber and Faber, 1979. Print.
- . *A War Imagined: The First World War and English Culture*. London: Pimlico, 1992. Print.
- Jones, Ernest. *Hamlet and Oedipus*. New York: Norton, 1976. Print.
- Lowry, Malcolm. *Ultramarine*. London: Picador, 1991. Print.

McCarthy, Patrick A. *Forests of Symbols: World, Text, and Self in Malcolm Lowry's Fiction*. Athens: The U of Georgia P, 1994. Print.

Williams, Mark. "Muscular Aesthete: Malcolm Lowry and 1930s English Literary Culture." *The Journal of Commonwealth Literature* 24 (1989) : 65–87. Web. 31 Oct. 2012.

横内一雄 「“I Am Going to Japan—or Aren't I?” ——『ウルトラマリン』における極東」 *Albion* 58 (2012) : 19–33. Print.